

## 芸劇dance ダンスファーム 「近藤良平のモダン・タイムス」

Interview ダンサー・振付家 近藤良平

### 近藤良平があなたと耕す！ 新しいダンスの地平

近藤良平が東京芸術劇場と取り組んできた、  
ダンスをもっと豊かにするプロジェクト「ダンスファーム」。  
今回は一般公募の皆さんが、豪華共演者とともに！



#### ダンスは本当に「身近」か？

ダンスは身近になった、といわれる。たしかに中学校の体育の授業で必須になったし、様々なメディアで目にするようにはなった。しかし本当にそうだろうか。あなたの日常生活の中に、ダンスはどれくらいあるだろうか。「身体を動かすことが気持ちいい」と最後に思ったのは、いつのことだろうか？

人気ダンスカンパニー、コンドルズの主宰にして日本のダンスシーンの牽引者、そしてダンスの裾野を広げてきた近藤良平は「ダンスが届いていない人はまだまだたくさんいるし、耕すべきダンスの地平は広大にある」と考えているようだ。

今回の『モダン・タイムス』は一般から参加者を募り、プロのパフォーマーと一緒に作る作品だが、この公演は、昨年度から行っている「芸劇dance ダンスファーム」の一環として上演される。文字通りまだ未開のダンスの農地(ファーム)を「耕す」ことを目的としたプロジェクトだ。

「これは、様々なジャンルの人にダンスへ関わってもらうことを目指したプロジェクト。昨年度は、身体・言葉・音・絵(映像)とそれぞれテーマを設定して2日間つづワークショップを行いました。下は16歳から、最高齢はむかし戦闘機に乗っていたという83歳の男性まで(笑)参加してくれた。ダンス未経験の人が中心だったけど、ダンスに対して様々な見方、様々な人生が集まって、非常に面白かった。今回はその成果を受け、あらためて一般の方をオーディションして作品を創ります」(近藤)

#### プロとアマをゴチャゴチャに!?

共演者も豪華だ。バレエの改革者モーリス・ベジャールのもとで活躍したバレエダンサーの小林十市。独特なファッションセンスを発揮し、パフォーマーとして幅広く活躍している篠原ともえ。シンガーソングライターのみならず多くのアーティストとのコラボレーションも活発な、たむらばん。コンドルズからは自らもダンスカンパニーを主宰しているスズキ拓朗が参加する。

「皆素晴らしい人達だけど、よくある『プロのアーティストと、それを取り囲む一般の皆さん』という形には絶対にしたくない。みなゴチャゴチャで、ミュージシャンのたむらばんにも踊ってもらうつもりだから(笑)。そしてダンス公演としてチケット代をいただけるクオリティのものを創る。3回公演なので、1回の盛り上がりだけでは通用しないからね」(近藤)

今回、近藤にとっては「東京芸術劇場のプレイハウスで上演する」ということが非常に重要だという。

「プレイハウスという大劇場の風格、雰囲気すごく良い。しかも数え切れないくらい一流の舞台人が立ってきた場所ですからね。畏れ多い(笑)。10年前の僕なら、怖くてできなかったかもしれない。それだけの場所に、皆と一緒に立つことが、参加者一人一人にとって重要なんだと思います」(近藤)

たかもしれない。それだけの場所に、皆と一緒に立つことが、参加者一人一人にとって重要なんだと思います」(近藤)

#### ダンスの力を信じている

タイトルは『モダン・タイムス』。有名なチャップリンの映画名が浮かんでくるが、この企画を考えている時にふと浮かんだ言葉なのだという。

「あえて関連づけてみると、あの映画が作られたとき同様、僕らが子どもの頃は、『これから世界はどんどん良くなっていくものだ』という希望を当たり前のように持っていました。そういう気持ちを、いまダンスを通して共有したい。ダンスの根本は、生きていく力を与えることだと信じていますから」(近藤)

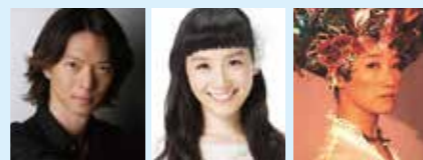
大きさではない、だけどとても大切なもの……そんなダンスの本質が楽しめる公演になりそうだ。



取材・構成: 乗越たかお (作家・ヤサクレ舞踊評論家)

#### 1月16日(金)~17日(土) プレイハウス

構成・演出・振付: 近藤良平  
出演: 北尾 亘、小林十市、近藤良平、篠原ともえ、清水ゆり、スズキ拓朗、たむらばん、デシルバ安奈、那須野綾、野坂 弘、三輪亜希子(50音順)+一般参加のみなさん



小林十市 篠原ともえ たむらばん  
主催: 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

詳細はP11へ

## Roots vol.2 「狂人なおもて往生をとぐ ~ 昔、僕達は愛した ~」



### 家族を問い、政治を、社会を問う演出とは

2014年3月のジャン・コクトー劇『おそろべき親たち』で圧倒的な演出を見せつけた気鋭の演出家・熊林弘高が、清水邦夫の名作戯曲にチャレンジする!!

#### とんでもないものを引き受けた

2013年にスタートした東京芸術劇場のシリーズ企画「Roots」は、60年代から70年代にいたる小劇場演劇草創期の名作戯曲に新しい光をあてるユニークな試みだ。ポツドールの三浦大輔が挑んだ、つかこうへいの『ストリップ物語』に続く第2弾は、気鋭の演出家・熊林弘高による清水邦夫の名作『狂人なおもて往生をとぐ』のリメイク。

野心的な人選である。熊林弘高は、14年3月にシアターウエストで上演されたジャン・コクトーの『おそろべき親たち』のように、海外の戯曲、特に、古典戯曲を取り上げてきた演出家だからだ。作品に隠されたドラマ性を鋭く大胆に暴き出す熊林弘高の演出が、清水邦夫の戯曲にどんな光をあてるのだろうか。

熊林弘高に話を訊いた。

「9月から勉強会を始めて、「これはとんでもないものを引き受けた」と思い始めました。もともとは、政治に疎く、社会オンチの人間。で

も、この戯曲は、作品が描かれた1969年当時の政治的背景だけでなく、現代の政治状況にも見事に呼応している。例えば、主人公の父親は大学で教鞭をとる人間ですが、どうやら、道徳教育を否定して、教科書の編集委員を干されたことがある人物らしい。今まさに、特定秘密保護法の問題があり、道徳教育のクローズアップがある。「たとえ事実をゆがめても、真実をゆがめることなく」というセリフがあるんですけど、これだって、昨今のメディアや新聞の問題や、プッシュ大統領のイラク攻撃の問題にも通じますよね」

#### エゴイズムを描くこと

主人公の青年の名前は出(いずる)だが、名前とは裏腹に引きこもりの男である。彼は精神に変調をきたしているらしく、自分の家族を売春の館にたむろする娼婦やその客と思ひ込んで、家族たちはその妄想に付き合い、ゲームのような人間関係を強いられる。

「自分が演出してきた『おそろべき親たち』や『秋のソナタ』『トライプス』などで一貫して描いてきたのは、「エゴイズムは、自分を守るために必要なものである反面、エゴイズムが高まると、相手の立場を想像する力がなくなっていく。それが争いにつながっていく」ということ。長崎の女子高生が同級生を殺害した事件で「人を殺してみたかったから殺した」と言ったのは、他者に対する想像力の欠落。誰でもそういう気持ちを抱く瞬間はありますが、その行為を踏みとどまらせるものは想像力。人が死ぬことでどれだけ周囲の人が悲しむか、罪を犯すことでどれだけ自分が苦しむかという。自分の演出スタイルは社会派ではないですが、人間と人間の関係性の中で、エゴイズムを描いてきた。今回は、人間と人間の関係を描きながらも、ダイレクトな政治性、社会性にも挑まなければいけないと思う」

熊林は、清水邦夫とあるエッセイの中で書いた「埋没していた時間が或るショックを受けて、真の時間を刻み出すかもしれない」という一節に深い印象を受けたという。これすなわち、今回の舞台をより深く味わうために、演出家がそっと差し出してくれたキーワードに違いない。

若くフレッシュな3人、福士誠治、門脇麦、葉山奨之に加え、「仕事をするのは初めてですが、10年来の知人」である緒川たまき、これまでも熊林演出を支えてきた名手のふたり、中嶋しゅう&鷺尾真知子と、何かが起きそうなキャストはそろった。

『狂人なおもて往生をとぐ』が、平成の新しいスタンダードにならんことを。

取材・構成: 戸塚 成

#### 2月10日(火)~26日(木) シアターウエスト

作: 清水邦夫 演出: 熊林弘高  
ドラマターグ: 木内宏昌  
出演: 福士誠治、緒川たまき、門脇 麦、葉山奨之、鷺尾真知子、中嶋しゅう

主催: 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)  
東京都/東京文化発信プロジェクト室 (公益財団法人東京都歴史文化財団)  
助成: 平成26年度 文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

詳細はP14へ

## 国立シャイヨー劇場 正式招待公演 『エッグ』パリ公演



撮影：岡本隆史

### 『エッグ』がパリに仕掛ける知のワナ

フランス国立シャイヨー劇場による正式招待!野田秀樹作・演出・出演、東京芸術劇場×ノダマップ製作による大規模公演『エッグ』が2015年3月、いよいよパリ上陸へ。劇場が想像を超えた驚きに包まれる予感・・・

#### 新たな発見と共感の場に

躍動する身体、弾けるポップス、そして見ている者をいつの間にか知の罠へと誘い込む野田ワールドが、ギョッと凝縮された『エッグ』。オリジナルキャストの妻夫木聡、深津絵里ら総勢30人による野田の大規模公演が、海外で初めて、それもパリ・国立シャイヨー劇場というフランスの名門劇場で正式招待作品として上演される。

シャイヨー劇場はパリのトロカデロ地区、セーヌ河を挟んでエッフェル塔の威容を眼前に望む絶好のロケーションにある。2014年5月15日、劇場ホワイエで開かれたプレス懇談には、折しも同劇場の特設舞台で『THE BEE』（英語版）を上演中の野田も出席。芸術監督のディディエ・デシャンから『エッグ』を含む2014/2015シーズンのプログラムが発表され、劇場側の意気込みを肌で感じられた。

2014/2015シーズンは「多様性を重視した」とデシャン。2012年にロンドンで見た『THE BEE』の「ビジュアルな演出に驚いた」と言い、さらに東京芸術劇場で『エッグ』の初演に大きな衝撃を受けたことが、今回の正式

招待につながったと明かす。

「大きな火花がずーっと続いていく作品です。観客には想像もつかない場所に連れて行かれる覚悟で来てほしい。期待したものを見つけないのではなく、新たな発見と共感を持って帰ってもらえる場であつたらいい。象を見たいと思っていったら、足元にいる蝶に感動した、というようにね」

#### 日本文化の多様性提示する好機に

デシャンは「多様性」を重視する背景に、自己中心化する個人や社会、不寛容へ傾きつつある現代世界への懸念をにじませる。劇場の

役割も「違った方向のベクトルのものを舞台上で提示することは人間の豊かさをもたらす。劇場とは自問する精神を忘れさせないようにする場」と明快だ。

『エッグ』もまた、スポーツや音楽の熱狂とナショナリズムの関係から、昭和史の暗部へといたる「日本人として自問する作品」（野田）である。と、同時にデシャンの狙いは、視点を変えて日本の演劇や文化の多様な魅力を提示することにもあるようだ。「東京は大通りにビジュアルな広告があるかと思えば、小さな神社があり、品のある国民というイメージがあるけれど、ものすごくバンクな作品もつくる。その落差が西洋人には魅力的。フランスは伝統的なものと、コンテンポラリーなものと、それぞれ観客が違う。『エッグ』はどちらの観客にも問いかけることができる舞台にしたい」

フランスでは、マンガから映画、ファッション、アート、伝統芸能にいたるまで日本への関心が驚くほど高いと聞く。『THE BEE』に続く、『エッグ』という現代演劇の上演は、まだ知らない日本文化の一端に触れてもらう好機になるだろう。

『エッグ』もまた、パリの新鮮な視線に刺激され、きっと予想もつかない変容を遂げるに違いない。そして、日本の観客の前に想像を超えた姿を現してくれるのを楽しみにしたい。

文：毎日新聞学芸部 演出元子

パリ公演：3月3日(火)～3月8日(日)

製作：東京芸術劇場(公益財団法人 東京都歴史文化財団)/NODA-MAP  
助成：平成26年度文化庁国際芸術交流支援事業 オフィシャル・エアライン：全日本空輸株式会社



国立シャイヨー劇場(パリ)

日本公演 NODA・MAP第19回公演「エッグ」  
2月3日(火)～22日(日) プレイハウス

作・演出：野田秀樹 音楽：椎名林檎  
出演：妻夫木聡、深津絵里、仲村トオル、秋山菜津子、  
大倉孝二、藤井 隆、野田秀樹、橋爪 功

大阪公演：3月26日(木)～4月8日(水)  
シアターBRAVA!

北九州公演：4月16日(木)～4月19日(日)  
北九州芸術劇場大ホール

〔東京公演〕主催：NODA・MAP 共催：東京芸術劇場(公益財団法人 東京都歴史文化財団) 企画・製作：NODA・MAP 協賛：住友生命/TOPPAN



東京公演詳細はP13へ